

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

優しさ。

鳥越中学校三年

なかだ 中田

あいらり 亜衣莉

受賞の言葉

人の「暖かさ」というものは、なにより大切だと思います。人に優しくできるのは、その人が「暖かい」からです。また、人と関わることで自分の考え方が変わります。だから、たくさんの人と接していこうと、改めて思えました。

白山市ジュニア文芸賞をいただいたことに、感謝しています。

今日、町内のバーベキュー大会があった。と言っても、たぶん私の町の人達は高齢者が多いにも関わらず、元気で騒ぐことが大好きだからやっているのだと思う。しかも、とても仲が良い。引越して来た人達と違って、すぐにうちとけることが出来る。だから私はこの町が大好きだ。とても暖かい。名前を知らなくても気にかけてくれ、どんなにささいなことでも自分のことのように心配してくれる。春、夏、秋、冬。どの季節にも行事がたくさんつまっている。

一人のおじさんと出逢ったのは、もう何年も前の話になる。この人は、私にたくさんのことを、とても分かりやすく教えてくれた。

「ツトム兄！」

そう呼ぶと必ず優しい顔を向けてくれる。

最初に会ったのは小学校低学年の頃だと思ふ。周りの皆がツトム兄のすぐそばで楽しそうに笑っている。名前すら知らないし、全く知らない人だったから私は幼いながらにとっても警戒していた。向こうは私が来てくれるのを楽しみ待っていることも知らずに。「ツトム兄！」と呼ぶ声と笑い声がいっまでも絶えなかった。二、三日後、周りの友達に交じって輪の中に入ってみた。この時からもの見方や考え方が大きく変わったと思う。ツトム兄に一番甘えていたと思う。とにかく、偉大な人であった。私にとつて。手品をいくつもやってくれたし、面白い話もいくつも聞いた。バイクの後ろにも乗せてくれたり、楽しい思い出ばかりが残っている。

今日、とても久しぶりに会っても何一つ変わらず私を可愛がってくれている。毎回会う度に私と出逢った出来事を話して必ず、

「本当にあの時は嬉しかった。大きくなったなあ。」

と言う。何回も聞いたよ、といつ言っても
「そんだけ嬉しかったんだから。俺、亜衣莉だけはボケたジジイになっても忘れないよ。」

と、返ってくる。嬉しいとしか言い様がなくて、だけど素直になれない私は

「えー、絶対無理でしょ。」

と言ってしまう。それでも心の中までお見通しの彼は嬉しそうに笑っている。もう、人の良さが顔に出ている。

バーベキューも終わりに近づき、子どもは神社で遊んでいる。私も後輩と一緒にそこへ向かう。小さい子達と一緒にになってかき氷を食べた。

その後はそれぞれで遊んでいた。私と一緒にいた後輩も、ツトム兄と初めて会ったけどすぐ仲良くなっていった。私といえば、小さい女の子二人といった。妹がいたらこんな可愛いのだろうと、羨ましく思う。

ツトム兄と進路の話をした。本当、よく気にかけてくれている。それも、ごく自然に言ってくれるものだから親よりも話しやすいかもしれない。

「勉強、勉強って言ってもそれだけじゃないぞ。スポーツとか、自分のしたいこと。自分に素直でいればすぐ進路なんて決まるし、頑張れるもんだから、心配すんな。」

誰も心配しているなんて言っていないのに。さすが、よく見てくれているとしか言えない。そう、思ったことを伝えると、

「あたりまえ。お前は小さい頃から危なっかしい我慢する所あるからな。」

昔は大好きだったツトム兄は、今も大好きだけどそれ以上に尊敬している。私もツトム兄みたいに心から氣遣えることの出来る優しい人になりたい。どれだけ私が落ち込んでてもいつも通り接してくれる。そんな優しい人と出逢えて嬉しく思う。

この町は、変わらない。伝統みたいなもので、ずっと続けている行事がたくさん。人だって、そう。みんな優しい笑顔を持っていると思う。

約一年ぶりのバーベキューは、私にふるさとの素晴らしさを教えてくれた。この町に住んでいる人達は自ら選んでここで暮らしているわけではない。偶然、住む所が同じだっただけなのに、優しくない人なんていない。優しさは伝染していくものだ、新しく学んだ。誰かに優しくされたいと誰かに優しくしたい。昔から知っていたはずなのに。改めて知るこゝとが出来た。これからも、今まで通りに、大切にしていきたいと思う。この町と、この町に住む優しい人達を。